

## 生物多様性は 自然の恵みを生み出す基盤

暑さもいよいよ本番を迎えた8月。抜けるような青空と真つ白な入道雲が、人々を海水浴やアウトドアへと誘い出す。大自然との触れ合いは、生き物たちとの出会いの場でもある。生き物の息吹を間近で感じる体験は、子どもだけでなく、大人にとっても発見の連続だ。そんな発見の喜びは、命を愛でる心を育むとともに、私たちが自然に生かされていることを教えてくれる。

しかし、人間が日々の暮らしを維持し、経済成長を追い求める中で、動物たちのすみかは少しずつ侵食されてきた。国際自然保護連合（IUCN）は、「絶滅の危機にある種のリスト（通称レッドリスト）」の中で、絶滅のおそれの高い種が、動物だけで1万種以上いると発表している。その中には、アフリカゾウやクロサイ、トラ、ジャイアントパンダなど、誰もが知る動物も含まれる。

2002年にオランダのハーグで開催された生物多様性条約第6回締約国会議（COP6）で、国際社会は、「現在の生物多様性の損失速度を2010年までに顕著に減少させる」ことを合意した。しかし、この「2010年目標」は、各国に具体的な行動を促すことができなかったため、達成には至らなかった。

そこで、2010年に名古屋市で開催されたCOP10では、まずは、2050年までの中長期ビジョンを設定。その実現過程として、生物多様性損失の根本的な原因への対処や、持続可能な利用促進などに関して、2020年までに達成すべき20の目標を定めた。それらは、開催地にちなんで愛知目標と呼ばれている。

さらに、2015年に国連で採択された持続可能な開発目標（SDGs）でも、海と陸の環境や生物の保全・持続可能な利用が目標として掲げられるなど、生物多様性への注目は高まりつつある。「SDGsが掲げる17の目標は、人間の生活に焦点を当てた開発目標ですが、その実現と生物多様性の保全は密接な関係にあります」。そう指摘するのは、一般財団法人自然環境研究センターの研究主幹で獣医師の米田久美子さんだ。

生物多様性を守ることが、なぜ人間の生活にとって重要なのか。それを結び付けるものが「生態系サービス」だと米田さんは指摘する。「私たちは、自然界から肉や魚などの食料を得たり、切り出した材木で家を建てたりしますよね。生態系サービス」とは、そうした「自然の恵み」のことを指します。小さな土壌生物から大きな哺乳類まで、多様な生物が存在することで、私たちはあらゆる場面で自然の恵みを享受できるのです」。

## 自然の恵みを享受する 共に生きるということ

しかし、ただ動物を守ればいい、という問題ではない。アフリカなどの野生動物が豊富な地域では、例えば、ゾウが畑を荒らしたり、時には人に危害を加えたりすることもあるからだ。日本では動物園の人気者でも、その生息地の人々にとっては、生活を脅かす「害獣」ということもある。

米田さんは、ザンビアの国立公園で野生動物の保護管理プロジェクトに携わった経験から、開発途上国では人間の生活を二の次にして動物の保全を訴えることはできないと強調する。「人間と野生動物が限られた土地で共に暮らすためには、地元の人々の意見に基づいた共生のビジョンを描くことが大切です。害獣だからと簡単に命を奪うのではなく、観光資源に生かす方法を一緒に考えるなど、現金収入を得られる仕組みづくりが必要なのです」。

特に、開発途上国では動物園を訪れる人の大部



## 特集 生物多様性

# 3千万種の宝

母なる地球――。

人間は、自然に畏敬の念を表し、その恩恵に感謝しながら生きてきた。

多種多様な生物の存在は、自然の恵みの源だ。しかし、限りある地球上のスペースで加速する人間の経済活動に伴って、多くの動物が絶滅の危機に追いやられている。

人間と動物が共生できる未来をつくる第一歩は、今ある暮らしを見つめ直すことから始まる。

取材協力：一般財団法人自然環境研究センター 研究主幹 米田久美子



EN



5 トキ 中国 (陝西省・河南省)

かつて東アジアの広い範囲で生息し、日本でも珍しくなかったトキ。しかし、乱獲などにより激減、絶滅の危機にひんして、日本でも一度は野生から絶滅。日本と中国は1985年からトキの保護と増殖で協力を続けてきた。徐々に野生の個体数が増えてきた中国で、地域住民の生活とトキの生存を両立させるための日中協力プロジェクトが展開された。

EN



4 アオウミガメ イラン (ゲシュム島)

カメの中でも最も美味とされ、乱獲の対象となったアオウミガメ。今は多くの国で捕獲禁止になっているが、他の魚と共に漁網に掛かってしまったり、ビニールなどのごみを誤って食べてしまったりと、人間の活動が今も悪影響を与えている。 →P8

EN



3 レッサーパンダ インド

国内の動物園で、ユーモラスな立ち姿が話題になったレッサーパンダ。実は、生息地の消失や毛皮などを目的とする密猟が原因で、野生での生息数が減少している。個体を保護するだけでなく、レッサーパンダが生息する環境を守り、地域全体の生物多様性を維持することが重要だ。

CR



1 ニシローランドゴリラ ガボン

イケメンゴリラ「シャバーニ」で話題のニシローランドゴリラは、西アフリカの密林地帯の住人だ。しかし、森林破壊や密猟が原因で、野生生息数は20万個体以下に減っている。その生息地域の一つで、国土の1割以上が国立公園に指定されているガボンでは、エコツーリズムを通じて野生生物と人が共生し、ゴリラをはじめとした野生動物を守る試みが続く。

VU



7 ニシハイロペリカン アルバニア イラン

かつてはドイツから東欧にかけての湿地帯に多数生息していた、世界最大のペリカン。繁殖地だった湿地の干拓が進み、現在の生息数は1万5,000羽を下回っていると見られる。湿地の保全は、ペリカンはもちろん、他の水鳥や、湿地に生息するさまざまな生き物を守ることにつながる。 →P8

VU



6 アマゾンマナティー ブラジル

水草を食べて生きる水生の哺乳類、マナティー。その中で最も小さいアマゾンマナティーは、南米の河川にすむ。小さいといっても、体長2.8メートル、体重400キロ前後もあり、肉や皮などを目的に乱獲されたことが原因で大きく数が減ってしまった。保護が始まった今でも、周囲の森の開発などが進んでおり、生息環境の改善も不可欠だ。

NT



9 ジャガー コスタリカ

ネコ科動物としてはアメリカ大陸最大で、熱帯雨林の王者ともいえるジャガー。しかし、森林が減ることで獲物の数が少なくなり、生息数が激減している。

VU



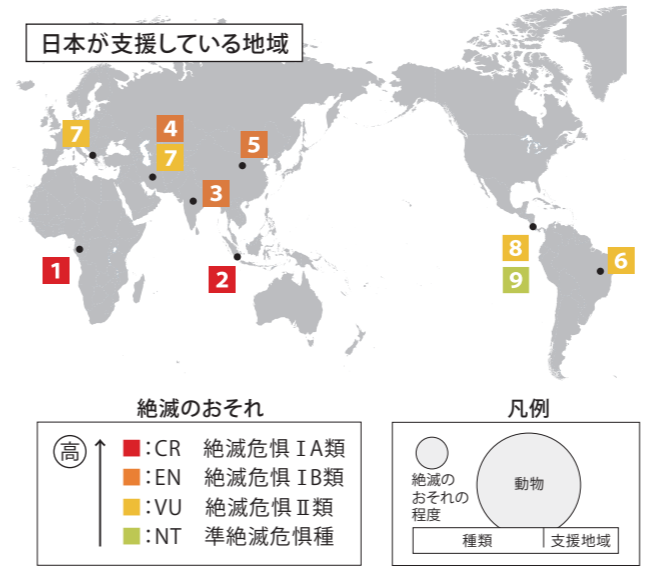
8 ミドリコンゴウインコ コスタリカ

羽の色が美しく、人になつきやすく言葉を覚えるほど賢いことからペットとしても人気のインコ。そのために密猟されることも多く、グアテマラでは野生のミドリコンゴウインコは絶滅してしまっている。

特集 生物多様性 3千万種の宝

# 絶滅危惧種を救え！ 日本の取り組み

世界各地には、絶滅にひんする野生生物が数多く存在する。危機の原因は、生息環境の破壊や密猟など、さまざま。日本は、そうした動物たちを守るだけでなく、地域の人々が自然や動物と共に生きる環境づくりに力を入れている。



CR

2 ボルネオオランウータン インドネシア

「森の人」オランウータンの生息数は、過去100年間で80%減少したといわれる。主な原因は、オイルパームなどのプランテーション開拓や違法伐採による森林の減少だ。近年は生息地であるインドネシアやマレーシアで森林火災が増え、オランウータンの生活の場はさらに失われつつある。オランウータンはボルネオ島やスマトラ島における森の象徴だが、一方で地域住民と生活の場を共有しているため、人と森の共存が必要だ。

分が外国人観光客だ。地元の人は、たとえ希少な野生動物と近い場所で暮らしていても、その重要性を意外と認識していないことも多い。また、地元の人々との共存という課題がある一方で、国際的な組織などが絡む密猟・密漁などの問題も依然として深刻だ。「日本では、野生のトキが絶滅しました。トキの場合は、農薬が減少の大きな要因だったように、動物が姿を消すのには、必ず理由があります。それを一つ一つ考え、手遅れになる前に、社会全体で対策を講じることが重要なのです」と米田さんは指摘する。人間が動物を管理しようとするのではなく、豊かな自然の営みを助け、そのおこぼれにあずかる。そんな日本らしい謙虚な精神で自然と向き合うことが求められている。